

● 天 文 漫 筆 ●

韓 退 之 の「三 星 行」

(野 尻 抱 影)

韓退之は言ふまでもなく唐代の文豪で、李白杜甫の後を承け、白樂天と並び稱せられた人である。天文に關する詩で、僕の漁つたところでは、李白に最も多く、杜甫白樂天之れに次ぎ、韓退之は最も少ないが、此の詩「三星行」は Astrology (九星術) を皮肉り、自分の運命を嘆じたもので、面白い。多少晦澁なので書き下ろしにして、譯を添へてみた。

我が生の辰(辰)・月、南斗に宿し、牛(牛)その角を奮ひ、箕(箕)その口を張りぬ。牛は箱(箱)に服するを見ず、斗は酒漿(漿)を挹(挹)せず。箕(箕)ひとり神靈あり、時として簸揚(簸)を停むるなし。善無きも名すでに聞こえ、惡無きも聲すでに謹(謹)す、名聲相乗除、得失少しく餘りあり。三星各々天に在り、什伍(伍)東西に陳(陳)す。嗟(嗟)汝、牛と斗と、汝獨り神(神)なる能はざるか。

(意味)私が生まれた時は月が南斗宿(射手座の $\kappa \tau \sigma \varphi \lambda \mu$ 等)に宿り、東に牛宿(山羊座の $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta$ 等)が角を奮ひ、西に箕宿(射手座の $\gamma \delta \epsilon \eta$)の四邊形が口を開いた形になつてゐた。牛とはいふが名ばかりで車(箱)を曳いてゐる様子もない。斗は杓であるが、酒を挹(ぐ)まない。たゞ箕宿ばかりは神靈があつて、箕(み)といふ名に相應しく、時々あふられる様に動いて止まない。それが私の中ぶらりんの運命を象徴してゐる。私は善い行ひをやつた事はないが、名が天下に聞えてゐるし。悪い事をしないが、わいわい非難されてゐる。そこで善名と惡聲とを乗除してみると。得が少く損が多い。私が生れた時には斗、牛、箕の三星宿が縦横(什伍)東西に並んでゐたといふのに、あゝ、汝牛と斗とは靈を示さず。箕ばかりに支配されて、絶えず身が落ちつかずに惡口ばかり言はれてゐる。

此の他、韓退之には「月蝕の詩」といふ長篇がある。盧仝といふ詩人が月蝕に擬して逆臣を譏つた詩に倣つたもので、『月形は白盤の如く、完完として天東より上る。忽然物あり來つて之を瞰(く)ふ、知らず是れ何の蟲ぞ』などいふ面白い句で始まる。機會がある人は一讀の價值があるだらうと思ふ。(3.30)